

日本在来馬の歴史的変遷と現状

尾崎 孝宏

はじめに

本論では、日本在来馬の歴史的変遷と現状について、前者については各時代に関する専門家の先行成果である二次資料文献から、後者については筆者が2010年11月にトカラウマ（鹿児島県開聞山麓自然公園）とミサキウマ（宮崎県都井岬）に関して行った見聞に基づき、概論的ではあるが検討を行いたい。

筆者がここで述べる日本在来馬は、日本で飼養されているウマが19世紀後半より、後述するような近代国家制度の介入の下で欧米のウマの血統を大幅に導入して大々的な品種改良が行われた結果、近世までのそれとは大幅に異なっているという歴史的経緯を踏まえている。すなわち、歴史的な見地より述べれば日本在来馬とは、近世まで日本で飼養されていたウマおよび、近代の品種改良を何らかの事情により免れ、結果として近世までの日本のウマの遺伝的特徴を保持したまま現在に至った、ごく少数のウマの総称ということになる。

無論、後述するように、そもそもウマは歴史時代になってから日本列島へもたらされた移入家畜であり、その後もユーラシア大陸からのウマの導入は行われている。加えて近代以降に行われた品種改良も、在来馬との雑種化を通じて徐々に行われたことを考慮すれば、「在来馬」と「それ以外のウマ」との境界は厳密なものとはいいがたく、実際には日本で飼養されてきたウマは、本来的に遺伝子的なレベルではある種のグラデーションを描き出しており、近代以降そのグラデーションの幅が増幅したと表現した方が正確かもしれない。本論では、このような「在来馬」という表現が内在しているある種の矛盾や曖昧さを認識した上で、近代的馬産とは一定以上の距離を置く存在として在来馬というものを考えていきたい。

また、本論で着目するのは、基本的に日本在来馬の家畜としての歴史および使われ方である。言うまでもなく、日本においてウマは祭礼などにおける「出演者」としても利用され、また絵馬というような形で日本人の民俗信仰においても少なからぬ影響を与えている存在である。ただし、こうした利用形態は家畜としては二次的なものである。例えば、アイヌの祭礼である熊送りで使用される熊は、野生の仔畜を捉えて育てているだけであり、「家畜とはその生殖がヒトの管理下にある動物である」（野澤1987：66）という野澤の定義にしたがえば、家畜であるとはいいがたい。そのため、本論ではこうした、必ずしも家畜である必然性のない側面については言及しないこととしたい。

なお、各時代に関する文献資料の入手については、馬事文化財団が1990年代に刊行した10巻本『馬の文化叢書』のうち、第1巻『古代一埋もれた馬文化』、第2巻『古代一馬と日本史1』、第3巻『中世一馬と日本史2』、第4巻『近世一馬と日本史3』、第5巻『近代一馬と日本史4』、

第7巻『馬学一馬を科学する』によるところが大きい。これらの書籍に収録された諸論文や、あるいは文献リストなどの書誌情報から、本論を構成するデータの多くが得られている。ただし、この叢書は多くが再録論文によって占められているのだが、初出の書誌情報等に不正確な点が若干存在する。そのため、本論で言及する際には可能な限り、初出の論文・書籍等を参照し、言及している。

ウマの家畜化と住環境

先史時代、現在の日本列島に相当する地域にはウマが存在した。それは今から1万年以上前の氷河期のことである。当時は寒冷な気候のため、日本にもウマの生育に適した草原が発達しており、岩手県では2万～3万5千年前のものと考えられる化石化した馬骨も発見されている（中村 1993：505、近藤ほか 1994：49）。当時は氷河として地上に大量の水が存在していた影響で海面低下が発生し、日本はユーラシア大陸と地続きであったため、ウマは陸地伝いに日本へやってきたものと理解しうる。ただし、約1万年前の氷河期の終了とともに気温が上昇し、大陸から隔絶することで形成された日本列島においては、森林が草原にとって代わり、ウマの生息を許す環境ではなくなった（中村 1993：505）。つまり、氷河期の終了とともに、日本列島ではウマが絶滅したものと考えられる。

むろん、学問的な論証において、不在の証明は困難である。ましてや、かつては確実に日本列島に存在したウマの場合、それが縄文時代に「いなくなった」事を論証することは不可能に近い。日本列島がいったん水没したとか、あるいはタクラマカン砂漠のような、ごく一部の例外を除き普通的大型哺乳類は棲息できないような環境になっていたならばともかく、現在の日本には、再野生化したウマであり、かつ消極的ながら人間の保護を受けているとはいえ、都井岬のミサキウマのように野生状態に近いウマが棲息しうる環境が存在する。

ただ確実なことは、現在のところ、縄文時代に日本にウマが存在したことを示す考古学的遺物、たとえば馬骨などは存在しないということである。つまり、少なくとも縄文時代の日本にウマがいたことは証明できないのであり、続く弥生時代に関しても、同様に今のところウマの存在を証明することはできていない。いや、より正確に言えば、かつて日本の学会には縄文時代や弥生時代にウマが存在したとする議論が存在した。たとえば、林田重幸と山内忠平は、日本の貝塚および遺跡から、現在までに40例以上のウマの歯と骨が出土しているとしており、具体的な遺跡名として鹿児島県出水市出水上知識貝塚（縄文後期）、愛知県宝飯郡小坂井平井貝塚（縄文晩期）、愛知県名古屋市熱田高倉貝塚（弥生期）、千葉県会場郡余山貝塚（縄文期）などを挙げている（林田・山内 1955：122）。

ただ、それが近年行われるようになった馬骨の科学的分析やDNAを対象とした遺伝学的調査により、かつて縄文時代や弥生時代にウマが存在したことの論拠とされていたものが否定され、

現状の認識に至ったのである。たとえば近藤恵らは、従来縄文時代のウマのものであると考えられていた馬骨にフッ素分析や放射性炭素による年代測定を行った結果、調査対象の縄文貝塚9遺跡で出土した馬骨のすべてが縄文時代のもではなかったことを明らかにしている。その中には、上述の出水上知識貝塚と余山貝塚も含まれており、これらの馬骨は中世から近世のもので、何らかの理由で後世に貝塚中に混入したものであることが判明した（近藤ほか 1994：50-51）。

一方、ウマの家畜化が開始した年代は、氷河期の終了より数千年後になる。その当時、野生馬の生息に適したステップは、現在と同様中央ユーラシアに広がっていたため、ウマの家畜化も中央ユーラシアのどこかで発生したと考えられている。ウマの家畜化の始まりについては現在もお決定的な説が存在しないが、ウマの家畜化の痕跡として有力視されている場所の一つがカザフスタンのボタイ文化（5,700～5,100年前）である。ボタイ文化の遺跡からは多数のウマが出土し、その大半は狩猟され食用となった野生馬と考えられているが、一部のウマには人を乗せたことによって生じた脊椎の変形、馬乳を入れていた痕跡のある土器が出土している。またウマを入れていたと思われる囲いの跡では、馬糞が堆積した土に特徴的な化学組成を示したという（本郷 2010：58-59）。

これらの議論から推測されることは、日本列島における野生馬は縄文時代に絶滅し、古墳時代以降になって、朝鮮半島から家畜化されたウマが、それを飼養する技術を持つ人々とともにもたらされたことによって日本におけるウマ利用の文化が発生した、というストーリーである。本論でも、こうしたストーリーを前提として議論を進めたい。

日本在来馬の渡来と普及（古墳時代～鎌倉時代）

現在のところ、日本に確実にウマが出現するのは4世紀末、すなわち古墳時代中期である（佐原 1993：16）。ただし、4世紀から5世紀前半にかけての馬具は北部九州で少数見出されているだけであり、日本列島全域にウマが広まるのはそれから約100年後である。なお、岡安によれば、5世紀の馬具は装飾的なものが多い点から判断して、ウマが実戦に投入された可能性は低く、騎乗者は有力豪族に限られたという（岡安 1986：65）。一方の中央ユーラシアでは、紀元前800年ころには騎射技術を有する遊牧騎馬軍団が出現したと考えられている（杉山 1997：25）。その意味では、家畜化され、さらに軍需物資として非常に重要な役割を果たしていたウマが日本列島に再登場するには、非常に長い時間がかかったといえるだろう。

ところが5世紀後半になると、佐原の表現を借りれば「にわかに日本にたくさんの馬が渡ってきた」（佐原 1993：17）という。その証拠が考古学的遺物であり、この頃から轡（くつわ）、鐙（あぶみ）、鞍、ウマの装飾、皮ひもを渡す金具などが、九州から東北地方に至る、広範囲の古墳から出土するようになる。また、ウマの埴輪に加え、古墳からウマの遺体も出土してい

る。これ以降、日本で乗馬の風習が非常に盛んになるが、こうした諸技術が朝鮮半島南部から渡来したことは、馬具、ウマ用の甲冑、馬面などの形態的特徴から確認できる。むろん、ウマも同様のルートを通して日本へ渡来したと考えられている（佐原 1993：17-18）。

こうした時代背景として、当時の日本列島における内乱状態があり、その傍証として、5世紀末から6世紀初頭の時期になると考古学的出土品に実用的な馬具が出現するようになる。岡安は、これは騎乗可能な層が中小の豪族層にまで広がり始めたことを示唆しており、当時の騎乗者は歩騎混成集団の指揮官クラスであっただろうと推定している（岡安 1986：66）。つまり、いわゆる騎馬軍団を編成するわけではないが、日本へのウマの大量移入は軍事的要請からなされたものと理解できる。

その後も、ウマは軍事的なツールとして普及していく。6世紀末の推古朝の時期には、信濃・駿河を中心とする地域には、少なくとも1,000騎を超える騎兵を中心とする軍事集団が形成され、天皇直属の軍勢力として活動していた（岡安 1986：69）。

また7世紀以降の律令体制下で、朝廷による馬匹生産の制度である牧（まき）が整備されていく。牧は軍馬など、国家が必要とするウマを生産することのみを目的としたが、その生産方法はかなり粗放で、一年中放牧して自然に増殖させる野馬生産であった。ただし日本には去勢技術は渡来しなかったため、自然増殖のままではオスウマが増加しすぎ、発情期のオス同士の闘争が激化して群れが不安定となる。こうした牧の管理上の便宜より、野馬追いで若いオスを捕獲し、これを軍馬に充てるというシステムが採用されていた（福田 1995：119-120）。

一方、平安時代中期以降、律令制の弛緩とともに牧は維持困難となり、ウマの大量飼養者は荘園主である貴族や地方有力者である豪族へと変わっていく。その中で、飼養預託を通じ、ウマが富裕な農民層へも浸透していったと考えられている。ただし、現在資料的に確認できる農民層のウマの用途は運搬用、それも荷を背に乗せて運ぶ駄馬としての用途に限られていたようである（鈴木 1968：51-54）。

当時のウマが犁を引く農耕用や輓馬として用いられなかった理由として、体格の小ささが挙げられる。1953年に鎌倉市材木座で行われた発掘で、鎌倉時代末の1333年に新田義貞の鎌倉攻めで戦没したウマを主体とし、その前後の時代のものを含むと思われる128頭分の馬骨が出土した。計測の結果、ウマの体高は109～140センチメートルの間で、平均129センチメートルであった。なお、現代のウマの体高は150～170センチメートルであり、ウマの分類としては150センチメートル未満のものをポニーと呼び区別している（林田 1957：305、安部 1995：187-188）。

ただし、現在モンゴルで飼養されているウマも体高が低く、英語では「モンゴリアン・ポニー」と呼ばれることもあるが、モンゴル競馬においては30kmほどの長距離を走行するほどの持久力を発揮する。そのため、馬格の小ささは必ずしも全ての能力における劣位を示すわけ

ではないが、少なくとも積載・牽引能力面で用途的な制限が加わることは否定できない。実際、筆者のフィールド経験上でも、モンゴルにおいて駄獣や車の牽引用として用いられるのはウシからラクダであり、ウマではない。

経済的手段としてのウマへの変質（室町時代～江戸時代）

このように、ウマは日本へ本来的に軍事用として移入された家畜であるにもかかわらず、時代を経るにしたがってその軍事的色彩は薄れ、駄馬という経済的手段としての色彩が濃厚になっていく。無論、戦乱の時代にはウマは武士が騎乗し、平時においても、ある階層以上の人々の移動手段として利用されていた。しかし、戦乱の時代の代表格である戦国時代においても、ウマの用途は軍事面のみに退行することなく、運搬用の動物として、市井の人々の間に普及していく。

14世紀に始まる室町時代、使者や物資をウマで運ぶ交通制度としての伝馬（てんま）が整備されていくが、この伝馬役を課されたのは農村であり、領主は農家から随時に牛馬を徴発し、伝馬として使用していたという（今谷 1986：457-458）。この事実は裏を返せば、当時農村にもウマの飼養が普及しており、随時徴発できるほどのウマが農家によって保有されていたことを示している。

さらに時代が下り戦国時代となると、戦国大名にとって支配地域内の物流の手段である伝馬は必然的にその重要性を増し、物流の中継地となる宿場町が成長するとともに、そこで流通業や商業に従事する人々に伝馬の賦役が課されるようになる（有光 1994：330-334）。

一方14世紀以降、こうした公的な制度とは別に、貨幣経済の浸透につれて荘園の余剰物資等を運輸、販売する目的によって発達した私的な業者である馬借（ばしゃく）が登場する。その名の通り、彼らの輸送方法はウマの背に荷物を載せ、それを人が追っていた。こうした活動は元々農閑期の農民が行っていたものであるが、次第に専門的な商人兼流通業者として成長していく。彼らはときに、領主層にも対抗しうる勢力となっていく（野田 1952：71）

こうした傾向は、戦乱の少なかった江戸時代において、より深まっていく。たとえば三河（現愛知県）北東部、信濃（現長野県）・美濃（現岐阜県）との境界地域においても、古くからの都市間輸送を担っていた信州中馬（しんしゅうちゅうま）に対して、三河山間部での商品生産が活発化した結果として農民が自前で運送手段を持つようになって出現した三州馬（さんしゅうま）が積荷を争って紛争を起こす、などの事例が発生する（乾 1970：24）。

なお、当時の馬産の中心地は東北地方、ことに仙台藩（現宮城県）や南部藩（現岩手・青森県）であった。特に南部藩は当時最大の馬産地であり、藩有である「官馬」のほかに、民有である「里馬」があり、いずれも藩の管理下で馬産の振興が図られていた。これらは自前の軍備用というより売却用であり、江戸時代も18世紀前半までは、幕府のウマ調達も仙台藩や南部藩

からの購入が主たるルートであった（森 1960：179-180、荒居 1962：75）。

このほか、東北では秋田藩などでも開発政策の一環で馬産が奨励されるが、越中によればそれは結局のところ農地開発の対象外である原野か、交通の要衝である街道筋でのみ発展したとされ（越中 1973：196-198）、その優先順位は農地開発より下位に置かれていた。そもそも、農地開発に不向きな土地の多い南部藩が最大の馬産地であったという事実が、こうした優先関係を傍証しているともいえよう。

一方、江戸時代のウマの飼養方法については、当時は極端に二分化していたといえよう。一方は零細な農民による飼養であり、母屋と馬屋が一体となった「南部曲り家」(なんぶまがりや)に代表されるような、時には飼料も与えるような手厚い飼養方法である。この背景には、藩などの家畜所有者からウマを預かり、仔が生まれたら売却して利益を折半するという預託制度が存在した（森 1960：180-183、香月 1985：23）。

その一方、幕府の直営牧や藩営牧といった大規模飼養の組織においては、ウマの飼養は基本的に放し飼いの自然繁殖、つまり律令時代と同様のテクノロジーが援用されていた。出産シーズンも一定ではなく、最盛期の春のみならず、冬や夏にも仔が生まれることもあった。大谷が描写する下総小金牧（現千葉県北西部）、森の描写する南部藩営牧は、いずれもそうした粗放な大規模飼養の事例である（大谷 1988：338、森 1960：179-180）。

ただし、江戸時代には、明治以降の馬匹の改良に通じるような試みも存在したこともまた否めない事実である。たとえば、将軍徳川吉宗は1725年から1737年にかけて、27頭の洋馬をオランダ商館から輸入しており、また水戸藩の牧場である大能野駒山でも、オランダや朝鮮半島からの輸入馬が放牧されていたという（荒居 1962：73、野上 1980：46）。

これらの馬匹改良は、軍馬の養成確保政策の一環として行われただけではなく、牧で繁殖したウマは農民へも払い下げられている。だが、その数は決して多くはなく、幕府の直営牧である房州嶺岡牧（現千葉県南部）の場合、1738年に在籍していた8頭の種オスのうち、5頭がペルシャ系であったこと、また1750年には、38頭が払い下げられたという記録がある（荒居 1962：72-78）。一方、野澤によれば、日本の一般農家に飼養されていたウマは、明治初期には100～150万頭を数えたというから（野澤 1997：136）、上記の数字はその中の微々たる部分であったといって差し支えなからう。

日本在来馬の残光（明治以降）

1868年の明治維新以降、日本におけるウマの使い道は大きな転機を迎える。すなわち、馬耕を伴う農耕馬と、大砲などの重量物を牽引する輓馬としての軍用馬の用途が新規に加わり、大きなウエイトを占めることになった。ことに後者に関しては騎乗用としての軍馬の需要も存在し、また時代的な背景もあって、欧米の血統を導入した馬匹改良への大きな推進力として作用

し、結果として日本在来馬をほぼ駆逐することとなる。

このうち馬耕について、森は南部藩においては藩政時代も馬耕を行っており、明治期の同地域における馬耕の普及に重点を置いた牧畜政策は、従来の農法の改良型であったと位置づけている（森 1960：187）。一方、香月は昭和前期に熊本の農機具会社の社員として全国で馬耕技術を指導していた中川茂幸の述懐に基づき、1940年代の南部地方の一般農家においては厩肥を得て農業生産を高めることと、仔ウマを取ることがウマを飼う大きな目的であり、馬耕は行われていなかったと述べている（香月 1985：23）。そのため、江戸時代随一の馬産地であった南部地方であっても、馬耕は多くの地域において近代以降に普及した技術であると理解できる。

なお香月は、日本のウマの体形が小さく、犁を引くほどの力を持たなかったため、犁耕にはほとんどウシを使い、明治になるまでウマを用いることが少なかったこと、そしてウシは西日本を中心に飼養されていたため、東日本には江戸時代まで犁耕そのものが普及していなかったとも述べている（香月 1985：6）。

この指摘は、日本中央競馬会より出版された『農村における人と馬とのかかわりあいに関する研究―農用馬にかかわる歴史』に見られる、北海道における近代以降の農用馬に関する記述とも一致する。北海道には15世紀以降、和人が東北地方より持ち込んだ北海道和種と呼ばれるウマが存在したが（野澤 1997：135）、農耕馬や輓馬としてウマを利用するため、より大型である欧米の血統を導入した形で品種改良が行われていった。たとえば、1906年の十勝国産牛馬組合種畜名簿に載る種馬は、7割がトロッター系、3割がペルシュロン系であったという（日本中央競馬会 1988：24）。これらはいずれも欧米の血統であるが、特に後者は大型で、輓馬として利用される品種である。

そして、十勝平野西部の清水町では、1913年に飼養されていたウマ2,604頭のうち北海道和種馬が769頭と約30パーセントを占めていたが、北海道和種馬は1924年には105頭、1935年には絶無となった（日本中央競馬会 1988：25）。こうした馬匹改良は特定地域の現象ではなく、陸軍が軍馬資源の改良と拡充のために全国規模で推進したこともあり、1945年には日本全国の農耕馬、つまり軍馬の調達先である母集団は、ほとんどが改良種によって占められる状況となっていたという（野澤 1997：136）。

もちろん、このような国家規模の馬匹改良運動は、相応の時間をかけて完成したものである。たとえば1907年に出版された『産馬大鑑』によると、江戸時代最大の馬産地であり、当時の日本では馬産の先進地としてみなされていた旧南部藩地域である岩手県や青森県においては1877年ころより、本格的に欧米からの種オスの導入が始まったとされている（原島 1907：189, 194）。なお1877年は、くしくも近代日本最大の内戦である西南戦争が勃発した年である。

こうした運動は、まずは江戸時代以来の馬産地を中心に展開していく。上述した三州馬の根拠地である愛知県北東部においても、堀江によれば「明治初年においても、改良意識も計画も

ない状態だった」(堀江 1994 : 31) ところが、1878年、愛知県北東部に「公立産馬学校」を設立する運びとなり、青森県・岩手県・宮城県からオス8頭、メス53頭を購入したことを皮切りに、馬匹改良が始まったという(堀江 1994 : 34)。

こうした馬産地で産出されたウマは、まず1894年に勃発した日清戦争に投入されることになった。たとえば三河地方からは、軍馬徴発令に基づいて939頭が徴発されたという。なお、こうしたウマは鼻疽等の悪性伝染病防疫のため、大部分は日本に戻れなかった模様であると堀江は述べている(堀江 1994 : 58,68)。

日清戦争を転機として、陸軍は軍馬の調達に一層の努力を傾注することになる。従来の日本のウマ利用において去勢は行われていなかったが、速やかな馬匹改良のためには種オスおよび種オス候補以外のオスを去勢する必要があるとして、1901年に馬匹去勢法が公布される。さらに日露戦争(1904～1905年)はこうした傾向に拍車をかけ、馬匹改良運動は全国的な広がりをもって展開していく。

一例を挙げれば、福島県南西部の山間奥深くに位置する南会津郡においても、1907年頃より「雑種」として登録されるウマが増加している。この「雑種」とは、多くが中半血種と呼ばれる種類のウマであり、『中付驚者の習俗』によれば、「洋種であるアングロノルマン種と地馬とを配合させてできたウマで、普通アングロノルマン種の血統が75パーセント混じったもの」を指したという。こうした品種は、産馬畜産組合が自ら購入したり、あるいは県や国から借り受けたりした種オスを使って各地に開設した種付け所を通じて生み出されたものである(文化庁文化財保護部編 1979 : 174-182)。

旧日本陸軍において、軍馬の体高の基準は136センチメートルであり、それを超えるウマが陸軍の買い上げ対象となっていた。そのため、体高の低い規格外のウマは経済的価値が低いとされた。単に法的強制力のみならず、こうした経済的誘導も馬匹改良運動を推進したと思われるが、いずれにせよ、体高の低い日本在来馬は積極的に保護される対象ではなかった。

唯一、例外的に体高の低いウマが選択的に利用されたのは、炭鉱であった。天井の低い坑内で使役するウマは127～136センチメートル程度が適しており、九州の三井三池炭鉱で使役されていたウマは、島原馬や対州馬であった。ただし、選択とはいっても、その買い付け価格は格安で、基本的に使い捨てという過酷な待遇であったという。なお村松は、両者の生産量の違いから、三井三池炭鉱の坑内馬の主力は、島原馬であっただろうと結論している(村松 1982 : 33-38, 46-47)。

実際、社団法人日本馬事協会から2009年10月に刊行されている協会誌『馬事協会便り 3号』12～13ページの記事によると、島原では明治33年(1900年)に馬匹の改良が計画的に開始した結果、熊本鎮台からの軍馬購入にこぎつけたこと、馬匹改良の方向性としてはアングロノルマン系の軽輓馬産地としての確立であったこと、牝馬の体高は明治38～39年(1905～1906年)当

時133cm（4尺4寸）であったこと、明治43年（1910年）には毎年2,500～3,000頭の馬を市場に出荷するほどの大規模な馬産地であったことなどが記されており、村松の記述と整合的である。一方の対州馬は、後述するような日本在来馬であり、逆に言えば対馬は他所へ売り出すための馬産の盛んな地ではなかった。

上述のような歴史的経緯をたどった日本在来馬が一転、注目を浴びるきっかけとなったのは今西によるミサキウマ（御崎馬）の調査である。今西は1945年まで張家口の西北研究所に所属し、モンゴル高原の生態研究を行っていたが、敗戦後に国内での新たな調査対象を模索していた際、宮崎県都井岬にいたミサキウマに着目し、1949年から数回にわたりその社会集団に関する調査を行っている（今西 1972a：41）。なお今西はミサキウマを「半野生馬」として位置づけており、調査当時もオスの去勢は行っておらず、種馬にしないオスは生まれた年の秋に売却していると報告している（今西 1972b：128）。ミサキウマは今西の尽力もあり、1953年に「岬馬およびその繁殖地」として国の天然記念物に指定された。

現在、日本在来馬として日本馬事協会が認定しているのは北海道和種（北海道）、木曾馬（長野県）、御崎馬（宮崎県）、野間馬（愛媛県）、対州馬（長崎県）、トカラ馬（鹿児島県）、宮古馬（沖縄県）、与那国馬（沖縄県）の8種類である。つまり、この8種類が、近代以降実施された品種改良から最も遠い位置にいたということになる。敗戦により陸軍というウマの大消費者が消滅したことに加え、1960年代の高度成長期より日本の農村で機械化が進行することで、農耕馬は在来種・改良種を問わず激減しており、現在の日本で馬産といえば、サラブレッド主体の競走馬生産とほぼ同義となっている。その意味では近代以降、現在に至るまでの日本社会は、ウマにとって特に多難な環境であったといえよう。

日本在来馬の現状

冒頭でも簡単に述べたように、以下の記述は、トカラウマについては2010年11月12日に鹿児島県開聞山麓自然公園で、ミサキウマについては2010年11月23日に宮崎県都井岬で筆者自身が短時間観察した馬群の状況および、現地で遭遇した関係者との短時間の会話から得られた情報を簡単にまとめたものである。いずれの在来馬も、自然公園的な環境で区切られた中での移動しか行けないという意味で人間の最低限の管理下に置かれているものの、繁殖に人為的な介入はなされず、放し飼いの状態であるという意味において、これらのウマは近世までの牧と大差ない飼養環境にあるといって差し支えないであろう。

まずトカラウマであるが、これはその名の通り、本来はトカラ列島の宝島で飼養されていたウマであり、開聞山麓自然公園へはその保護のため1963年に移送されてきた。開聞山麓自然公園は、開聞岳の山麓一帯に設置された公園で、鹿児島の民間会社が所有、運営している。公園は山麓に入り口（料金所）があり、3合目の登山口にある展望台までが一般客の立ち入るエリ

アとなっており、ゴルフ場が隣接している。公園内は舗装道路があり、自動車で移動可能である。なお、以下の情報は、筆者の直接観察に基づくもの以外、全て料金所の公園職員氏からの聞き取りによる。なお、入場券に印刷された写真にはトカラウマが写っており、入場券の裏に描かれたイラストマップにもトカラウマのイラストと放牧時間が記されていることから、トカラウマは純粋な保護対象としてのみならず、集客の一環として放牧されていることがうかがえる。

トカラウマは、料金所近くの牧場（家畜囲い）で夜を過ごし、早朝から夕方までは公園内で放牧される。舗装道路上では、ゴルフ場の入り口手前に駒止めの可動柵が設置されており、馬群の移動可能な範囲は、下は料金所付近から上は駒止めまでとなっている。また、海沿い以外には山中にも柵が設置されているようである。

公園側の説明および入場券の記載によると、日中8:00~15:00がトカラウマの園内放牧時間、夕方から夜間にかけての15:00~8:00は牧場内放牧となっているが、基本的に移動はウマ任せであり、人が追うこともないので、この時間区分はおよその目安であるとのことであった。なお、牧場には飼育員もおり、以前トカラウマの頭数の少なかった頃は出産介助や育児放棄の仔を哺乳瓶で飼育したりしていたというが、現在はあまり育児に介入することもないという。

現在、公園内のトカラウマは合計48頭、オスメス比ほぼ半々である。馬群の基本ユニットは母子群であり、それが複数集まり、オスに率いられた群が園内に3つ存在する。その中でも1頭の立派なオスがボスとして認識されているようである。なお、オスは1頭のみ去勢されているが、それ以外は全て未去勢であり、1群の中に複数のオスが含まれるほか、群れに属さないオスも存在するという。

筆者の公園訪問時、料金所からすぐ上に18頭ほどの群が草を食んでいた。13時過ぎと遅めの訪問であったため、牧場近くまで戻ってきていたものと想像される。なお、朝は斜面を上っていった方に多く分布しているという。植生的には所々、人為的に樹木が切られ草原化した林地というロケーションであり、林内で採食することが多いためか、顔や足に大量のハギの実をつけており、また高温多湿の故かハエも多くなっていたことが印象的であった。また、人にもよく慣れており、採食中に筆者が徒歩で近づいても、逃げもせず採食を続けていたことも印象的であった。

なお、この馬群から100mほど離れた地点、林地の奥にはメス4頭とオス3頭ほどがやや距離を置いて採食しており、この個体群も先述の群のメンバーであると思われる。なお、オス同士は一定以上接近すると明らかに緊張状態となり、片方が甲高くいなないたり双方で小突きあいをしたりと、喧嘩の始まりそうな様子が複数回観察された。筆者がフィールドとするモンゴルにおいては、種オス以外の去勢は常識であるため複数のオスが緊張状態を発生させることを

目にすることは皆無であるが、野生状態の馬群はこのように常に複数のオスが1群の中に存在し、緊張状態にあるのがむしろ常態であるのだらうと思われる。

今年は10頭の仔が生まれたが、自然に任せてあるため、例年約半数の当歳仔が死亡するという。栄養状態や虫害、病気は容易に想像されるが、海に転落して死亡する当歳仔もいる。ただ民間会社の所有であり、維持費の問題から現在以上に頭数を増加させるのは困難であるため、現在以上の人為的介入はそういう意味からも困難であるという。馬格も小さく、一番遅く生まれたという当歳仔は鹿と見紛う小ささであり、成馬でもメスはモンゴルの当歳、オスでも3歳くらいの大きさしかない。

なお、先述したように、モンゴルで飼養されているウマは世界的な基準で見れば、小型に属する。それと比較してもトカラウマが小さいということは、日本在来馬がいかに小型であるかを如実に示す証左となろう。なお、筆者が観察したトカラウマはおしなべて痩せており、また栄養価の高い飼料ではなく、草ばかりを食べるため腹だけが肥大化する「草腹」の様相を呈していたが、公園職員氏によればこれがトカラウマの本来の姿である、との説明であった。またトカラウマの寿命は10歳に満たないという。

開聞山麓自然公園において、トカラウマは上記のように放牧されているだけではなく、中腹にある「トカラウマふれあい広場」と名づけられたスペースにも数頭が常置され、観光客がより容易にアクセスできるような便宜も図られている。筆者の訪問時、ここには当歳仔と思われる3頭とオスが2頭、全てロープでつながれて置かれていた。なお、オス2頭のうち1頭は去勢されており、かつて乗馬の訓練も受けたが、目を怪我したために現在は乗馬としては用いられないという。こちらのスペースのウマは夜間も近くの囲いで飼育され、例外的に給餌もされているため、他のウマにもまして人懐こい。ここの仔ウマは大きくなると放して群に戻すが、中には群になじめず、単独で行動したり、彼らだけで独立した群を形成したりするケースもあるという。

このように、一部は観光資源として利用されつつも、多くは夜間のシェルターとなる家畜囲いの提供を受ける以上の人間の介入がない状態で、また経費面の制約からも人間の介入を受けづらい環境下で、現状の頭数を維持しているというのが開聞山麓自然公園におけるトカラウマの現状である、とまとめることができるだろう。

一方、ミサキウマはトカラウマ以上の野生度である。今西がミサキウマを「半野生馬」と呼んだことは既に述べたが、ミサキウマは江戸時代初めに高鍋藩によって設置された御崎牧に由来するとされ、その管理方法も近世までの「牧」を基本的に継承している。筆者が現地で出会った牧畜協会の職員氏によると、ウマは2歳になると番号の入った焼印が押されるだけであり、人間はそれ以外の繁殖にも飼育にも介入を行うことはなく、またシェルターを提供すること、観光資源としての繋留もない。なお、現在法律적으로는ミサキウマは野生動物という扱いで、

家畜に適用される家畜伝染病予防法の対象外となっている。

現在の都井岬は開聞山麓自然公園と同様、部外者の来訪にあたっては、ミサキウマ保護育成のための協力金（寄付金）という名目ではあるが、実質的な入場料が必要であり、その意味で公園的空間と呼びうる。また岬という地理的特性上、入り口には駒止めの門が設置され、ミサキウマが自由に行動できる範囲は都井岬近辺のみに物理的に制約されているなど、両者の立地は類似点も多い。ただし、それでも両者と人間との関係に差異が存在するのは、その歴史的背景としての来歴が異なるためであろうと想像される。

なお、筆者が実見したミサキウマは、当歳と2歳の仔を連れたメスウマ、当歳の仔を連れたメスウマ、オスウマ2頭の合計7頭であり、2つの母子群とオスウマ1頭は群を構成している様子であった。なお、もう1頭のオスは筆者の観察途中で、草原の下に広がる樹林から現れた。その後、2頭のオスは至近距離で見合って蹴ったり、いなないたりして時々けんかをしていたが、そのうち2頭とも下の樹林へ降りて行ったので、一応は群の構成個体という位置づけであるのかもしれない。また、先述の母子群に属する「77」という焼き印が押してある2歳の仔は、焼き印部分が化膿していた。なお、ミサキウマもトカラウマと同様、馬格は小型である。

これらのミサキウマは筆者の訪問当時、草原に生える芝とツタを食んでいた。牧畜協会の職員氏によると、夏は芝を中心に食べているが、冬になって食料が不足するとツタも食べるという。また、岬の一带は上が草原、下が樹林となっているが、冬になると樹林の中で1日中過ごし、上の草原には上がってこないという。さらに、成馬が死ぬときには下の樹林で死ぬので、事故以外で成馬の死体を見かけることはない、とのことであった。これらの事実は、トカラウマと比較して、はるかに人間との関係が希薄なミサキウマの実態を示していると思われるが、その一方で、トカラウマほどではないにせよ、ミサキウマも筆者ら見知らぬ人間の接近を忌避せず、その様子から人間との接触が日常的であることがうかがえた。

以上、トカラウマとミサキウマの事例で見たとおり、現在の日本在来馬は、すでに運搬用など家畜としての用途はほぼ失われ、保護あるいは鑑賞という機能が辛うじて見出せるに過ぎない状況にある。また、生育環境についても、本来的にウマには不向きな湿潤温暖な環境において、さらに母集団の少なさから近交退化による絶滅の懸念も持たれつつ（野澤 1997：136-137）、辛うじて命脈を保っている状態である。もちろん、こうした保護の対象ともならず、高度経済成長以降の時代の変遷とともに消えていった改良種も、在来馬とは違った意味で、やはり不幸な存在であるといえるだろう。

こうしたウマのあり方は、筆者が主たる研究対象としているモンゴル牧畜社会と比較した場合、鋭い対照を見せる。現在のモンゴルにおいても、モータリゼーションの進展により、移動手段としてのウマの価値が相対的に減少している。しかしそれでも、ウマ、特にモンゴル競馬に出場する駿馬はある種の威信財として機能しており、人々の愛着が以前と比べて減少してい

るわけではない。

また馬種についても、モンゴルにおいては一貫して、在来小型馬が飼養されている。こうしたモンゴル在来馬は、筆者の実見した日本在来馬と比較すればやや大きいとはいえ、サラブレッドなどと並べれば明らかに小さい。ただし、モンゴルにおいては近代を境目とするウマの用法の変化・断絶は存在しないため、馬匹改良運動というような現象も発生しなかったのである。さらに、モンゴル競馬と同様、馬乳を発酵させて製造する馬乳酒も夏場の栄養源として多くのモンゴル人に珍重されており、食料源としても重要な役割を果たしている。そのため、現在も都市生活者を含む多くのモンゴル人がウマを飼養し、草原地域においては100頭以上の馬群を擁する人物も珍しくない。モンゴル人にとって、ウマは現在においても、非常に有用な家畜の1種類であり続けている。

一方、既にみたように、日本へのウマの導入はある程度完成された技術として、特定の階層の限定的な用途、すなわち広義の軍事用のために持ち込まれる、という形で生じた。時代が下るにつれて、その用途は実戦用や運搬用など徐々に拡大をみせたものの、結局のところ、日本では食料源や主たる動力源を家畜に依存するという牧畜民的な生活スタイルは発生しなかった。それが近代に入り、ウマは一時期、「産業動物」と呼びうるような形で日本各地に「再導入」された。しかし日本の産業構造の変化に伴い、あたかも古い機械が廃棄されるように、ウマは日本から姿を消していき、現在ではわずかなサラブレッド、そして改良種、さらにもっと少ない日本在来馬が、その種類に応じ競馬・乗馬用、観光用、そしてある種の保護動物として点在している、というのが日本におけるウマの現状である。また、こうした部分にしかウマを残し得なかったのは、結局のところ前近代も含めた日本社会におけるウマの位置づけが、一部の限られた人々だけが触れる「特殊な動物」という域を出るものではなかったことを反映しているためだと思われる。

参考文献

- 阿部猛 1994 『鎌倉武士の世界』東京堂出版。
荒居英次 1962 「徳川吉宗の洋牛馬輸入とその影響」『日本歴史』174：72-81。
有光友学 1994 『戦国大名今川氏の研究』吉川弘文館。
乾宏巳 1970 「三河山間部における商品流通の展開—信州中馬と三州馬の紛争をめぐる」『地方史研究』20(1)：13-29。
今谷明 1986 『守護領国支配機構の研究』法政大学出版局。
今西錦司 1972a (1949) 「御崎馬の社会調査 報告第一」『動物の社会』思索社、41-59ページ（初出：『生理生態』3号）。
1972b (1950) 「半野生馬の社会生活」『動物の社会』思索社、127-137ページ（初出：民科生物学研究会編『生物の集団と環境』岩波書店）。
越中正一 1973 「秋田藩の馬産—仙北郡田沢村とその周辺」今村教授退官記念会編『秋田地方史の研究』金沢文庫、186-203ページ。
大谷貞夫 1988 「享保期の下総小金牧について」『国学院雑誌』89(11)：327-343。
岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵：考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『考古學雑誌』71(4)：54-76。
香月節子 1985 「犁耕をひろめた人々—馬耕教師群像」『あるく むる きく』220：4-39。

- 近藤恵・松浦秀治・中村俊夫・中井信之・松井章 1994 「“縄文馬”はいたか」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』5: 49-53。
- 佐原真 1993 『騎馬民族は来なかった』日本放送出版協会。
- 杉山正明 1997 『遊牧民から見た世界史 民族も国境もこえて』日本経済新聞社。
- 鈴木健夫 1968 平安時代における農民の馬 『日本歴史』239: 42-55。
- 中村潤子 1993 「解題—馬文化研究の動向と収載論文の理解のために」森浩一編『馬の文化叢書 第1巻 古代—埋もれた馬文化』馬事文化財団、496-519ページ。
- 日本中央競馬会 1988 『農村における人と馬とのかかわりあいに関する研究 農用馬にかかわる歴史』日本中央競馬会。
- 野上平 1980 「水戸藩における馬産の発展—北部山間地帯を中心に」『茨城史林』8: 43-54。
- 野澤謙 1987 「家畜化の生物学的意義」福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の原像 生態・社会・歴史』日本放送出版協会、63-107ページ。
- 1997 「日本在来馬をめぐる諸問題」『畜産の研究』51(1): 135-142。
- 野田只夫 1952 「馬借集団の活動とその構造」人文地理学会編『歴史地理学の諸問題』柳原書店、71-78ページ。
- 原島善之助 1907 『産馬大鑑』裳華房。
- 林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産学会報』28(5): 301-306。
- 林田重幸・山内忠平 1955 「日本石器時代馬について」『日本畜産学会報』25 (2-4): 122-126。
- 福田豊彦 1995 『東国の兵乱とものふたち』吉川弘文館。
- 文化庁文化財保護部編 1979 『中付驚者の習俗：福島県』国土地理協会。
- 堀江正臣 1994 (1979) 「三河馬盛衰記」神崎宜武編『馬の文化叢書 第5巻 近代—馬と日本史4』馬事文化財団、29-92ページ (初出：私家版)。
- 本郷一美 2010 「遊牧の起源と伝播」白石典之 (編)『チンギス・カンの戒め—モンゴル草原と地球環境問題』同成社、44-60ページ。
- 武松輝男 1982 『坑内馬と馬夫と女坑夫：地底の記録—呪咀』創思社出版。
- 森嘉兵衛 1960 「南部の馬」地方史研究協議会編『日本産業史大系 3 東北地方篇』東京大学出版会、177-187ページ。